倉田シンジ　表紙イラスト：あかめ

黒牢姫

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『黒牢姫』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

黒牢姫

倉田シンジ
表紙／あかめ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ジゼル王女

暗殺事件を生き残った、ただ一人のアクィタニア王族。その美貌もさることながら、理知的で英雄然とした姿は王国再興の希望。

ワイト公

王国からの独立戦争を続ける公爵。その野望は留まるところを知らず、今では王国そのものを手に入れるべく権謀術数を巡らす。

ルーク王子

ワイト公の第一子。まだ■さを残す少年だが、それ故に残酷でもある。

ワイト公国首都の中心。広大な城館の中庭には、尖塔がそびえ立っていた。
長いらせんの階段を持つ、このあたりで最も高い建築物だ。
大陸一の宗教建築士を招いて建てられたと言われる塔はこの城館のシンボルであり、軍事力の増強をもって勢力拡大にいそしむ公国の力の象徴とも言える。
だがその塔は、負の一面をも隠し持っていた。
天を目指すように突き立つ塔の頂とは逆方向、施設はその地下にも伸びている。延々と続くような階段を下りていった先にあるのは――多数の牢獄だった。

厚い石壁の空間に粗悪な油の燃えるチリチリした音が響き、ところどころに設けられた空気穴からは冷たい夜気が降りてきて灯りを揺らしていた。
小さな炎が揺らめくたびに、でこぼこした石壁に映る人影も揺れる。
その夜、影の数は三つだった。
「ひんっ！　んっ……はぁ、はぁ……、ふ……うう……！」
一つは女性。苦しげな呻きを伴って、服から覗く白肌がぬめ光るようにうねっている。
彼女はおよそ牢獄という環境からは縁遠い、肌に密着する上品な黒のドレスを纏っていた。その肩は細く、肉付きも無駄な肉を感じさせないほど淡く引き締まっている。
ただ、ドレスに締めつけられた胸元だけは柔肉を盛り上げ、今にも衣服からこぼれ落ち

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

そうにして揺れていた。
「ずいぶんとこなれてきましたな。舌が……んっ、絡みついてくる……」
「こちらも、あっという間にずぶ濡れですよ……？」
他の二つは男だった。こちらも牢獄には似つかわしくない立派な服を着て、恰幅のよさからは暮らしぶりの豊かさを垣間見ることができる。
女性は四つん這い。男の一人はその前方に身体を投げ出し、もう一人は尻を掴んで後方に陣取っている。
彼女は男の股間に舌を這わせていた。そそり立つ肉の棒に白い手を添えて緩やかにしごき上げながら、亀頭は唇が呑み込んでいる。
ドレスの裾は大きく捲り上げられ、純白の下着の上から指が這って。ぐじゅぐじゅになって中身の秘裂を透かせているそこを抉るようにつつかれるたび、乳房の膨らみがぷるんぷるんと震えている。
苦しげな表情の女性が、男を見上げた。
「んっ、や、やめて……そのようなこと、言わないで……」
中年と言って間違いのない男たちと違い、女性は驚くほどに若かった。年の頃は十代後半か。綺麗に整えられた眉には凛々しさを、艶やかな唇には女性らしさを持っているが、端正な容貌にはわずかにまだ幼さを残している。

今は苦しげにたわめられた目元に上品さがあった。弱々しい視線を投げかけているにもかかわらず、瞳には人を引きつけるような光を湛えている。すっと通った鼻筋も、スリムな輪郭も、知性を感じさせる広い額にも、隠しきれない育ちのよさがあった。

「ここの暮らしもすでに二週間。そろそろ慣れてきたでしょう」

「そ、んな……ことは……」

男の言葉に、女性はわずかに肩を震わせた。

「牢獄とはいえ、ベッドもあれば鏡もある。食事も衣服も従僕も与えられて、暮らしも悪い物ではないでしょう?」

確かに、その牢獄は見た目のわりに備品が充実していた。

彼女がかつて使っていた物には程遠いが、衣類をしまう棚もあるし柔らかな寝床もある。食事は待機している従僕が運んでくるし、日に一回は水浴びを許されていた。

食事の度に従僕への奉仕が要求されるのと、水浴びは見張りの警備兵が好色な視線を送ってくる衆人環視の状況で、という恥辱がなければだが。

そして、国の大臣たちが審問という名目で牢獄にやってくる、毎夜毎夜のこの時間がなければ。以前の暮らしは別にしても、牢獄暮らしというわりには快適な生活が送れたことだろう。

「さて姫様、次は私にしてもらいましょうかな」

「……う」
姫と呼ばれたことに対してか、あるいは目の前に突き出されたペニスを見てか、少女と言ってもいいような彼女の瞳が哀しげに揺れて伏せられた。
白銀の長い髪は緩やかに結われて背中を伝い、黒いドレスの背に天の川を描いていた。それが、彼女が身体を前傾させるとともにサラリと流れる。
「んぷ……ふ……」
言われるがままに、柔らかな唇が亀頭に吸いついた。
ちゅぷ……にち、ぐぷぷぷぷ……。
にちゃりとする粘液の感触を唇の柔らかさで集めて、そのまま熱い塊を口腔の中へと導いて――ぬるりと添わせた舌で肉茎の裏側をなぞり上げる。
「おお、言われずともワシ好みの舌遣いをしてくるとは。やはり姫様はもともと好色の気がおありになったようですな」
ぴくんと身体が揺れて、伏せていた目で思わず見上げる。
(わ、わたくしだって……こんなことしたくない……!)
しかし、心の中での抗議は男の視線に搦め捕られてしまう。
自分を蔑むような男の視線に射抜かれて、下腹にじくりと湿った熱が湧いた。
(わ、わたくしは……わたくしは……)

自分に戸惑い、心が乱れる。ただ舌先のみが活発に動いて、ちゅぷっ、ずず、ぷぷっ、ぴちゃ、ぴちゃっ……！

ペニスへの愛撫を続けていた。

「んあ……！　くふ……んむ……ふ……くひゅ……んん……」

四つん這いの背中にのしかかるようにして、前後入れ替わった男が抱きついてくる。服の上から乳房が握られ、ぐにゃりと歪んで柔らかさを見せつけていた。

「はふ……んっ、む……ああ……は……」

胸を揉みしだかれながら、淡い吐息を漏らして肉棒へと舌を這わせる少女。

アクィタニア国の王女にして、王家の正統なる血筋を引く唯一の人間。彼女はこの国に囚われる数週間前まで――穢れを知らない純潔の姫だった。

※

二百年の歴史を持つサリカ朝アクィタニア王国の王城。

歴史ある調度品の並ぶ一室には、この国の首脳部が十数人集まって話をしていた。

「すでに北アクィタニアは公国の勢力下にあります。ここにきて、様子見を決め込んでいた諸侯も次々に公国へと恭順し、天秤の傾きはもう、持ち直せないほどに……」

沈痛な面持ちでそう報告しているのは、この国の軍事面を統括する重鎮の侯爵だった。

かつてはタカ派で知られた侯爵のあまりに勢いのない言葉に、他の面々も表情に絶望の

色を隠せない。

アクィタニア王国とワイト公国の戦いは長きにわたって続けられている。王国は連合国家であり、各地に封じられた諸侯が王に従う形での平和統治を続けてきた。その諸侯の一つ、ワイト公が野心を露わにしたのが五十年前。最初は紛争だった小競り合いが次第に戦火を拡大し、戦争といえるまでになった混乱はずっと続いている。

「とはいえ、南アクィタニアの諸侯はいまだに王への恭順を誓っております！　いざとなればその武力をもって教皇庁に訴え出て、公国の大義名分を奪うことも……」

最後にせめてもの気を吐いた侯爵だったが、それは無理な話だった。

宗教面で大陸を統治する教皇庁はすでに今回の戦争を静観することに決めており、それはいまやアクィタニア王国という母体を遥かに超える戦力を背景にした、ワイト公国による圧力であることは明白だったからだ。

すべての均衡が崩れたのは十年前のこと。

王家の血脈の大半が絶やされた、大規模な暗殺事件によってだった。

王や王妃、後継者とされていた王子たちが次々に謎の死を遂げ、王位継承権を持つ中で生き残ったのはわずかに一人の少女だけ。王の末子、ジゼル王女だった。

教皇庁によって定められた王位継承は齢二十をもって第一の条件とする。よって王女はいまだに王位継承の儀式を行えず、正式な王の座は空位のままだった。

政治的混乱に動揺した辺境諸侯たちは、すでに国力増強の兆しを見せていたワイト公国への接近を画策し、その支配下に寝返り始める。かくして両国の戦力は拮抗し、ここにきて逆転が決定づけられたというわけだった。

会議場にいた面々の視線が、判断を仰ぐように中央の人物に注がれる。

「……」

ひときわ立派な黒檀の椅子に男装の少女が座っていた。

無駄な装飾を省いたシルクシャツの上には革製の胸当てが着けられ、肘から先には同じく革製の手甲が。スリムな腰つきからほそやかな太腿へと続いていくのはぴったりと尻の曲線に密着した黒のキュロットだった。足下もなめし革の黒いブーツで固め、今すぐにでも馬に乗れる服装だ。胸当てにきゅっと押さえられた乳房の膨らみと腰のくびれ、そして後頭部でぐるりと巻かれた流れるような白銀の髪がなければ、騎士になりたての貴族、凛々しい若者に見えたかもしれない。

その瞳がわずかに細められ、かすかに俯きがちになる。額にはめられた王家の紋章付きプラチナサークレットが、飾りを揺らしてシャラッと軽い音を立てる。

途端、息を呑むような儚さと美が前に出た。

張りを持った白く艶やかなうなじが白銀の間から覗き、赤い唇が憂いを滲ませてきゅっと噛み締められる。

何かを決心して、彼女は顔を上げる。端正な顔に浮かばせたその表情に垣間見えるものは、悲壮な決意だった。

物心ついたときには女王として王位に就くことを運命づけられ、武術も教養も帝王学も徹底的に叩き込まれてきた、純粋培養の王女。

名をジゼルという少女はすでに、高貴な王気を宿していた。

「わたくしは……これまで尽くしてくれた皆に感謝しています」

ジゼルが唇を開くと、彼女の決意を察した諸侯たちの間に悲しみの動揺が広がっていく。彼女の言葉を否定するざわめきが広がっていく。

「とんでもございません！　王が亡くなってから今まで、王国を支えることができたのは姫がいてくれたからこそです……！」

王女の成長をずっと見守ってきた、内務を担当する初老の男爵が震える声で抗議する。

王位に就くことができないとはいえ、ジゼルはここ数年、若輩ながらにその手腕をいかんなく振るってきた。膨れ上がる公国に対抗すべく行った税制の改革や軍制の改革。守りと自分の正統性を固めるための隣国外交。

そのすべては名君と呼んでも差し支えないほどに的確なものだった。世が世なら、間違いなく王国の繁栄の導き手になれたであろう。

だが悲運なことに、それも勢いづいた公国の暴力を抑えるには至らない。

（ありがとう、爺……）

ジゼルは自分の父親代わりとなってくれた男爵に優しい視線を向けて頷いたあと、再び口を開いた。そのつぶらな瞳に、決意を滲ませて。

「公国の要求を呑むことにいたします」

やはりか、と重鎮たちの間に悲しみが湧き上がる。

公国から突きつけられていた要求――それは事実上の完全降伏だった。王位の廃止と連合国家たる王国の解体、そして直轄領と直轄軍の没収。王女には死ねと言うに等しい。おそらく彼女は、見せしめとして一生牢獄暮らしを強いられることになるだろう。

王家に味方した諸侯の処分がどうなるかはまだ分からない。だが、少なくとも王家ほどの酷い扱いは受けまいというのが王女の見立てだった。つまり王家は――ジゼル王女は、自らを人身御供に戦乱を終わらせる決意をしたのだった。

部屋の中に、姫の決断なら仕方がないのかもしれない――そんな空気が満ちる。

「……仕えるべき王に守られるなど私は納得できません！　自分は最後まで戦います！」

だが一瞬の沈黙のあとに口火を切ったのは、重鎮でもなく王女でもなかった。

警備のために部屋に詰めていた、まだ年若い騎士だ。今年に入ってやっと叙任を受けたばかりの、血気盛んな青年だった。

彼は没落して平民化した家系から実力を認められ、騎士として引き上げられた者だ。自

分の家が先進的なジゼルの施政によって救われたと感じているだけに、その忠誠心もひとしおだった。
本来発言できる立場にない者が口を開いたことを誰も咎めない。それどころか、
「……そのとおりですな。こんな若者に先を越されてしまうとは情けない」
互いに苦笑いをしながら口々にそんなことを話し始める。
「ですな。我々も姫様に……最後までお供しましょう」
再度、王女に視線が集まる。誰もがこの儚い姫のために命を投げ出す覚悟だった。
「……」
感極まって涙腺が緩みそうになるのを、ジゼルは必死に堪える。
（みな……ありがとう。本当に嬉しい……）
王たる者には権威が必要だ。そう簡単に涙を見せてはならない。感謝の言葉など軽々しく発してはならない。だが、嬉しかった。これほどに自分を慕ってくれる者がいることが。
ならばその気持ちに少しでも応えたい。自分のためではなく、彼らのために。
彼女は凛々しく表情を引き締めると、気持ちも新たに命を下した。
「七日で……可能な限りの兵を集めるように。その後、公国首都に向けて乾坤一擲（けんこういってき）の進軍を開始、その勝利をもって少しでも優位な交渉条件を引き出します」
「王女！」「姫っ、よくぞ申された！」

周囲に喜色が溢れる。

「指揮はわたくし自らが執ります。みな、奮励して事に当たるように！」

意気の上がった諸侯と騎士たちは、我知らず鬨の声を上げていた。

※

七日後、はためく王国の旗と忠誠を誓った多数の兵たちに囲まれて、白銀のハーフプレートを身につけたジゼル姫は鞍上の人となっていた。

凛々しく髪を靡かせる王女の指揮下、集った軍勢は士気も高く王国を出立。やがて敵国内になだれ込んだ王女軍は、地理的条件や兵数の劣勢をはねのけて首都に迫る勢いを見せた。移動を含め、実際の戦はわずかに二週間。しかし、その勢いは周辺へと伝わるに充分なものだった。

王国を裏切ったはずの周辺諸侯が、再び静観の構えを見せ始めたのだ。

ワイト公国はそれを感じ取り、焦った挙げ句、一時しのぎの休戦交渉を申し出た。

アクィタニア王国軍はその申し出を受け、さらなる交渉を開始。依然として王国不利な条約ではあるものの、王家の存続を勝ち取ることに成功する。

一、アクィタニア王国はワイト公国の独立を認める。

二、公国に従う諸侯の、連合国家からの離脱を認める。

三、二国は同盟を結び、王女は王位継承の年齢まで公国が預かる。

これが新たな条約の概要だった。

要するに、公国が削り取った領土はいただく、王国はそのまま同盟国として存続するが、王女は人質としてしばらく公国で身を預かる。そういう条約だ。

文面だけ見れば一方的な条約だが、滅亡寸前だった状態を鑑みれば格段の進歩だった。時間を稼いで王位の継承ができれば正統性が確立し、王国の地盤は固まる。そうなれば、奪い去られた領土を取り返すこともジゼル王女ならば可能だ――王国の誰もがそう考えた。

圧倒的な劣勢からの脱出。ジゼル王女は、勝利といえるものを勝ち取ったはずだった。

※

条約が結ばれてから一ヶ月後。

自分を迎えにきた公国の軍に守られるようにして、ジゼルはワイト公国に初めて足を踏み入れた。それはまるで輿入れのような、恣意的なものを感じさせる大仰な行列だった。

今、彼女は街道を馬車に揺られている。

（ふう……。こうして見る景色は、鎧を着たときとはずいぶん違いますわね……）

戦場での姿とは一変して、ジゼルは高貴な者しか着ることの許されない、黒いシルクのドレスを纏っている。額につけたサークレットの飾りが、馬車の揺れに合わせてシャリシ

ャリ心地よい音を立てていた。

王女であり将来の女王であるジゼルも、まだ少女といっていい年齢だ。生まれた時にはすでに戦時中だった彼女からすれば、戦時以外での外出は初めてと言ってもよい。

本来なら同じ年頃の貴族の娘とお茶会を開いたり、宝石を眺めて吐息を漏らしている年頃だ。内心、この遠出にも政治とは無関係な関心があったことは否めない。

「あれはなんという植物を栽培しているのですか？　この地方では有名なのですか？」

馬車から見えるものを物珍しく質問していたジゼルに、公国が用意した侍女が甲斐甲斐しく答える。そんな光景が延々と続くことになった。

……公国の首都に入るまでは。

「わが国はどうですか？　公王様の統治が行き届いていますでしょう？　王はこの国を救ってくださった英雄です……！」

侍女に話しかけられ、さっきまでは浮き立つ心を抑えられないでいたジゼルも違和感を感じてしまう。まるで宗教だ、と思った。

ワイト公爵はこの一ヶ月で、公王へと名を変えていた。会ったことのない相手だが、宮廷内部の事情にも詳しい侍女にこれだけ慕われているというのは、それなりに人徳の賜物とも思える。が、なにかが違う。

たとえば、馬車から見えるこの街並み……。

「あれほどの軍隊を抱える国にしては、街並みが貧しいようですが……？」
王国の首都と比べると、明らかに活気がない。それは、施政の苛烈さを表していた。
「とんでもありません！　みな、公王様に感謝しているからこそ質素な暮らしを心がけているのです。活気がないように見えるのはそのせいでしょう」
そう答える侍女の目が、どこか虚ろに感じられるのは気のせいだろうか。
「……そうですか」
ジゼルは侍女から目を逸らし、もう一度窓の外に目をやった。
無駄に大きな通りには出店の一つもなく、怪しげな風情の女たちと男がなにやら立ち話をしている。人が目に付くのは、昼間から開いている酒場ぐらいのものだった。
それでも、貧民街らしき場所を抜けると立派な貴族たちの屋敷が現れた。こちらはそれなりの活気を持って、人が行き交っている。
やがて、周囲の建築物とは一線を画す大きな城館が見えてくる。それが公国の宮廷であり、すべての中心となる建物だった。
（あれは塔？　あんなに高い塔、初めて見ます……）
その視線が、城館に高く聳える塔の姿を捉えていた。
「これはどういうことですか……？」

城館に到着するやいなや、ジゼルは敵国の兵士に囲まれていた。
そうして連れてこられたのは、城館の広間でもなく、離れの別邸でもない。
さっき城館の外からも見えた塔の前だ。周囲の騎士たちは彼女の問いに答えず、それどころか無言のままジゼルの腕を掴んだ。腕が引っぱられ、身体が引きずられる。塔の扉が開かれ、階段を降ろされていく。
「つっ……！　なにをするのですか！　放しなさいっ！」
抗議は黙殺された。先日までの敵国とはいえあまりにも無体な扱いだ。
（まさか、条約を破り、わたくしを亡き者にしようと……）
嫌な考えが頭をよぎる。否定はできなかった。
「……」
採光窓は吹き抜けの遥か上方にあるだけで薄暗い。空気が淀んだ空間が延々と下に続いている。蝋燭と油の匂い、それと奇妙な生臭さがかすかに鼻を突いた。
（わたくしが死ねば、王国の者たちだって黙ってはいないはず。でも……）
様々な可能性が頭の中を駆け巡ったとき、歩みが止まる。
目の前には熱い木造の扉がある。大きめに取られた覗き窓には鉄の棒が何本も渡され、錠も非常に頑丈そうなものが付けられていた。
（これは……牢獄……？　それとも……）

次第に遠くなる大臣の声を背に聞きながら、部屋の一つに放り込まれる。蝋燭一つしかない暗い部屋の中、ジゼルはへなへなと膝を崩した。

（逃げ……られない……。わたくしは、もう……穢れているのですね……）

震える手で渡された紙を見つめる。泣きそうになる自分と戦いながら、そこに書かれた文字を読んでいく。部屋の中には、娼婦用の衣装も置かれていた。

（ならばせめて……心だけは。心の中でだけは……王女でいなければ……）

たとえ娼婦の真似をせねばならなくとも――自分は王女だ。

アクィタニア王国を支えるために、生きねばならない。それが王族としての責務。

そう覚悟を決めても、紙に書かれた文字を読めば身体の震えは止まらない。

初めての客が来たのは、それから数刻が経ち、日も完全に落ちた頃だった。

「くふ……ん……！　はぁ……は……ぁ……、ひんっ！　はぅ、ううぁ……」

ベッドに寝かされたジゼルの下半身に男が重なっている。簡単に結わえただけの長髪はすでにベッドの上に広がり、淫ら姿をいや増している。

あてがわれた服は、乳房を異様に強調するようなゴシックドレスというのが近かった。

すでにスカート部はまくられ、下半身は露わ。脱がせやすくするためか、大きく開いた胸元は編み上げの紐で留められている。窮屈そうに押し込められた乳房はいまにも布からこぼれ落ちそうだ。

こうちシーン試し読み
ここからスタート！

男は執拗に、ねちっこく、舌先が膣口の周囲をちろちろくすぐっていた。
「綺麗なオマ〇コだ。今日が初めての仕事と聞いたが、まんざら嘘じゃなさそうだな」
「……ぅ」
見られている――。貴族でもない、ただの平民に、自分の恥ずべき場所が。
羞恥心が胸を焼き、頭を掻き乱す。
革新的な政を行ってきたジゼルだけに、自分は不必要な身分の差別感覚など持っていないと思っていた。しかし現実は厳しい。
無理はないかもしれない。王族として育てられ、いずれはどこかの王族と結婚するはずの王女が、こうして不特定多数の男と寝ることなどどうして想像できようか。
（こんな……屈辱……。もう、いやぁ……）
客は粗雑な男だった。武器商人をしているというその男は、年齢四十前後、脂の乗った腹をでっぷり肥やしている。
「ここの娼館は掘り出し物の女が多いから気に入ってるんだ。へへ、今日は大当たりだ」
「あ、ありがとう……ひっ、ございま……っ！　はぁ……う！」
遠慮なしに這わされた口先がクリトリスに吸いつく。ぞわりと背筋が粟立ち、ジゼルは目をぎゅっとつぶってそれだけを言うのが精一杯だった。娼婦としての立ち回りをかろうじてこなしながらも、湧き上がる怯えは隠せない。

「ここは客もそれなりに金持ちが多いらしいしな……。気に入られれば買い上げられるか、宮付きの高級娼婦としてもやっていけるって話だ。お前もその器量なら……」

顔面ごと吸いつくようにして股間に顔を埋めた男が、王女の小振りな陰核を剥き上げる。

「やっ……ひぁあ！　そ、そこは許し……ひっ、くぅぅ……」

ぴりりと痺れるような強烈刺激に、少女の身体が硬直した。そこが敏感すぎるほどの弱点であることは、すでに自分自身よく知っている。

「なに言ってるんだ。娼婦ならもっと悦んでみせなきゃダメだろう？」

「っは……ひぁ……！　ご、ごめんなさ……んうっ！」

確かに、渡された紙にはそんなことも書かれていた。客に差別なく楽しんでもらうために、娼婦は積極的に犯し犯されることを楽しまねばならない、と。

ただ、そんなことを言われても具体的にはよくわからない。あくまで受け身に、無理矢理に犯され続けてきた王女にとっては。

「気持ちいいなら気持ちいいって言った方がいいって言ってるんだよ」

「そ、そんな……こと……はひっ！　あはぁっ……！」

思わず反論しそうになったジゼルを黙らせるように、男の指がつぷりと膣口に侵入。そのまま、小さな穴を引き伸ばすようにしながら、指を曲げて裏側をこりっと掻き擦る。

ぞくっと悪寒のようなものが背を走り、少女は喉を反らしてベッドに頭を擦りつけた。

「ふうっ！　は……ぁ、き、気持ちいいです……っ」
なかばやけ気味に発した言葉に男がにやつく。
「そうそう。……ういういしいのもいいんだがな、処女じゃないんだろ？　娼婦に流れてくるようなら、それなりに経験も……」
じゅぶぶっ！　ぶぷっ、くちっ！
男は指を回転させながら、少女の反応を確かめるように激しく掻き回し始めた。
（かは……！　激し……いっ、ひぁぁぁぁ！）
ジゼルは無意識にきゅっと指を噛み、声を抑えようとしている。
だが、ヴァギナはぐちゅぐちゅと掻き回され、膣口はくにくに引き伸ばされて……身震いを誘発する痺れが下腹から湧き上がってくる。
「んう！　はぁ……あう……ふ！　ひぃ、んっ、はっ、んんんっ！」
ジゼルの身体はきゅっと縮んだり、かと思うとぴくんと跳ねたり。細かく痙攣しているように身体を揺らして、限りなく細めた目を切なげに震えさせている。必死に声を抑えようとしているのが男の目にも明らかだった。
「なかなか感度もいいようじゃないか。それに……キツイ。こりゃ具合がよさそうだなぁ」
「はぁ……はぁ……んっ、ひぅ……はぁん……っ」
ジゼルは息も絶え絶え。ただでさえ緊張するのに、それに羞恥や屈辱、様々な慚愧の念

が入り混じって頭が混乱し始めている。
男は遊び慣れているのか、その手管は女体の的を射たものだった。
（はぁ……はぁ……、だめぇ……。こ、こんなの……）
じゅぶ！　にちちっ！　くちくちくちっ……！
（ふうううっ！　そ、こぉ……、いやっ、こんなのおかしいですっ……）
指が股間を弄るたび、ぞわりぞわりと全身の毛が逆立つ。股間を中心に広がる痺れは甘く緩急に富んでいて彼女に慣れさせなかった。
ちゅぷ……。
その刺激に応じて愛液が染み出してきている。与えられる快楽に正直なその反応を感じるまでもなく、ジゼルは自分の身体の変化、感情の揺れを感じ取っていた。
（わたくし……はぅうっ！　ま、まさか、感じて……っ⁉　しょ、娼婦のまねごとで……名前も知らない……一晩限りの相手に……っ。ひぁ……くふうううっ）
じわりと胸を熱くするのは羞恥か。それとも欲情の炎か。
王女の肉体は、処女を散らされてからの凌辱によって否応なしに開花させられつつあった。それでも必死に自分を保てたのは、王女という立場があってのこと。王女でもなくジゼルという名の少女でもなく――新たに与えられた娼婦という役割は、男に翻弄され混乱する少女にとって心を冒す媚薬となっていた。

「はぁんっ！　そこぉっ、ひゃぁんっ！」
膣口内部の敏感な裏側を押し擦られて、抑えていた声が吹きだしてしまう。一度堰が崩壊すれば、あとは連続して漏れ出てしまうのを止められなかった。
「いひっ！　あぅ……は、そこっ、きもち……んんっ！　はぁん、やぁ……！」
くねくねと身体をよじり、鼻にかかった声を出して。汗が噴き出して少女の身体が持つ欲情の香りを漂わせ始める。
「オマ〇コがひくついてきたぜ。きゅうきゅう指に絡みついてくる……」
「いやぁ……言っては……なりませ……んんんっ！　くひゃうぅ、はん、ふうっ、んっ」
男は指を引き抜くと、両手でヴァギナを開陳して膣口の暗がりに舌を突き込んだ。
そこからむわっと噴き出す女の香り。
発情を催させる淫臭に誘われて、武器商人は長く伸ばした舌で膣口をほじくり返す。
ぶちゅうっ！　くちっ、ぶぶっ、ぴちゃぴちゃ、じゅちちっ！
その行為はまさにほじるという言葉が適切だった。きゅんっと締まってくる膣口をくにくに伸ばしながら、愛液を掬うように伸ばした舌先で中の粘膜をえぐる。垂れ出てきた女の汁を、ずるるっと音を立てて吸い上げる。
「ひんっ！　吸っては……あんっ！　そんなもの……す、吸い取ってはだめぇ……」
自分の体液が吸飲されていると知って、王女はその恥ずかしさに首を振った。

「あんたのオマ〇コ汁、いい味してるじゃねえか」
口の周りをべたべたにして、男は王女の肩に手をかけた。
「あ、ああ……あふ……」
呆然と宙を見つめているジゼル。そのドレスの編み上げ紐がしゅるりとほどかれる。
男の腕がぐいっと前をはだけると、服は簡単に左右へ開かれてしまった。押さえられていた乳房がたぷんと揺れながら、重力に負けまいとするように天へ向けつんと突き立つ。
白雪のような肌と、その頂点にぽつりと浮かんだ鮮やかな赤。きめの細かい柔肌は全体的に汗を浮かせて、豊かな量感でもって男の手の平に吸いついてきた。
「んあ……はんん……むね……、そんなに乱暴に……っはぁ……」
両手に余る乳房が、上から包み込まれてぐにゃりぐにゃりと揉み込まれる。押し込まれて潰れた柔肉はそれでも弾力を見せつけるように反発し、柔軟に形を変えながら右へ左へ卑猥にひしゃげた。
（なんなの……このかんじ……）
乱暴なほどに乳房を捏ねられているというのに、痛みはほとんど感じない。それどころか胸の肉はじんっと痺れたような感覚を発して、芯から火照りだしている。
指で乳首を挟まれて、少女の睫毛がぴくりと震える。
くり……くり……。

擦るように、摘むように。引っぱったり押し込んだり、好きなように弄られている乳頭がにょきにょきと屹立していく。それとともに、えもいわれぬ甘い感覚が胸の奥から染み出てくる。掻痒感に似た心地よさが、乳首のてっぺんに生まれていく。

「ちくびぃ……くぁ……んっ、ちくび……はぁん、うふぁ……ああ……」

焦点の定まらない瞳に涙を浮かべ、夢見心地に呟きをくり返すジゼル。

「なんだ、ここがいいのか？　なら、ここも吸ってやる」

男が乳首に吸いつく。

ちゅる……ちゅぱ、ちゅばばっ。

赤子のように吸いついては、大きさの増した乳頭を甘噛み。火山で言えば噴火口にあたる乳頭の台地を舌先でくりくりとほじった。

途端に、ジゼルの瞳と唇が開かれる。

「きゃはああっ！　ひっ、ほ、ほじっちゃ……んんっ！　くふっ！　ああふう！」

激しく身をよじるが、乳肉は男の手の中。豊かな肉は引っぱられて円錐形を伸ばしながら、先端部を舌先に耕される。

くりくりっ！　と舌が躍るたび、

「やはぁぁんっ！　ふぅあ、痺れる……！　いやっ、怖い……っはあ！」

少女は面白いように喘ぎ乱れる。

いままで王女はどんなに犯されようと、心のどこかでは快楽を拒絶していた。無意識に心の境界線を引いて、最低限の理性だけは失わないようにしていた。

その線が、あやふやになりつつある。

「もう我慢できねえ。入れさせてもらおうか」

相手が本気でよがっているのを感じ取って、武器商人も我慢できない。

「はぁ……あああ……。だめ、いま入れられたらっ……入れてはなりませんっ！」

「なんだ。どこかのお姫様みたいな言い草じゃねえか。さっきから時々そんな口調だが……さてはどこかの貴族様が落ちぶれて娼館にでも流れてきたか」

「……っ」

男にとっては冗談のつもりの言葉にズバリと言い当てられ、心臓が飛び跳ねる。

「そういやあんた……妙に気品があるあたり、隣の国の王女様に似てるかもしれねえな。遠目で一度見ただけだが……名前はなんと言ったか……」

諸国を渡り歩いているであろう武器商人の言葉に、心臓が張り裂けそうになる。

「ち、違います！　それより、は、はやく……あなたの股間のものを……くださいっ」

ごまかすために言った言葉だが、それは彼女にとっても男にとっても、効果はてきめんだった。

「おお、言われなくとも……すぐに掻き回してやる！」

股間に押し当てられる硬い感触。それだけで、ちりっと痺れが走り抜ける。
（ああ、入れられてしまう……！　わたくし、入れられて……しま……、っっっ！）
ず……にゅるるるっ！
「ひは……！　くううううんっ！」
挿入と同時に、ジゼルは身体を弓なりにして大きく喘いでいた。
「はぁ……はぁ……。んっ！　くふうっ！」
男は片足を持ち上げて大きく王女の股を裂くと、ひねりを加えながら腰を押し出した。
「ふっ、ふか……あああんっ！　当たるっ！　奥ぅ！　子宮に……ぃ」
おそらく、いままで経験した中でもっとも大きな男根だった。それがねじり込まれるように、股と股を密着させて奥まで突き込まれてくる。
ぐち！　にちちっ！　ずぷ、ぷぷぷっ！
激しい交合の音が響く。
「すげえぞ。きつくて……絡みつく……、ううっ」
姫の秘貝はぱっくりと開いた中心に男根をくわえ込んでいた。膣口は見るからにきつそうに肉棒を食い締め、ぬるついた肉でぎゅうぎゅうに締めつけながらもぴったりと貼りついている。引き出されるペニスに合わせてめくり返る粘膜が、愛液を勢いよく噴きこぼすほどだった。

にちゅ！　ずるるっ、ぐちゅるっ！
「ああんんっ！　ひぁ……は……！」
「どうだ！　気持ちいいだろう、俺のペニスは！」
「ひぁ！　そ、れは……わ、わたくし……ああんっ、んっ、ふぅ……あっ、くぁんっ……」
興奮を強くした男が返答を求めると、娼婦は涙を浮かせた目を戸惑わせる。
娼婦として口にすべき淫らな言葉は理解している。自分が快楽を感じてしまっていることは認めたくはないが……しかし……言葉だけなら……。
答えてはならないという思いが、自分は娼婦なのだから――そんな思いにも背を押されてすみっこへと押しやられていく。
そこにとどめの一押し。ずんっと最奥まで踏み込んだ亀頭が、子宮の入り口近くをくりっとえぐり、彼女の身体を跳ねさせた。
「はううっ！　き、キモチイイで……すっ！　あ、あなたの、おちんちん……っ」
にちにちっ！　ずぷ、ぷぷ！　にゅるるる……ずぷっ！
「あはぁぁ！　すごいっ、すごいのぉ……ぉ！」
どこからが娼婦としての演技だったのか、どこからが本心なのか、自分でも分からない。
それでも恥ずかしすぎる言葉を口にしたという事実は、王女の誇りを削り取るのに充分だった。

（はぁ……あああ！　もう、だめぇ……おかしくっ、なる……！）

ガクガクと身体を揺らされ、少女はあられもなく腰をくねらせてしまう。求めたくはないのに、いま以上の快感を得ようと身体が勝手に動いてしまう。心はその動きに引きずられ、どんどん暗闇に引き込まれて……。

「ひゃ！　あああんっ！　くぅ……ああ！　気持ちいい……、あ、アソコが……疼いて……！　たまらないのっ……！」

ジゼルの口からは、彼女が忌避する言葉が次々に漏れだしていった。

※

数日が経ち、あっという間に一週間が過ぎて。

今日もまた、ジゼル王女は一夜限りの相手に身体を開いている。

最初の男から口伝いに噂が広まったのか。ここで上物の娼婦が客を取っていることは、そのすじの人間に知れ渡って客が途切れることはない。

噂の中には、アクィタニア王国の姫君に似た娼婦だという話まであった。まさか本物とは思わなかっただろうが、さる零落貴族の姫君だとか、破産した大商人の娘だとか……まことしやかな噂も流れている。

それをジゼルは知らない。知らないまま、淫らに股を開く。

「いらっしゃいませ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/